

## 子どもの自己評価と相互評価を促進する学び方と学級文化の構築 —教科横断的な実践からの構築—

渡辺理文(北海道教育大学 教育学部 札幌校 准教授)

## 研究の背景と問題意識

実践をする小学校では以下のような課題が見られていた。

①ノートに自分の考えを表現することに課題がある(→自己評価に関わる課題)

②自分の考えをクラスの仲間に発表すること・仲間の考えを聞くことに課題がある(→相互評価に関わる課題)

この課題の解決のために、子どもにより良い学び方とは何かを明確にして、学び方を学習する必要があると考えた。学び方を学習するために、直接的に学び方を提示するのではなく、学級文化を構築してクラス全体でより良い学び方とは何かを考えることにした。

第6学年1クラス37名を対象にした。期間が2020年6月からであったため、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)拡大抑制のための臨時休校終了時からの実践である。休校中に自宅で課題を進めているクラスの子どもから電話で「自信がもてない」との相談があった。休校終了後の授業では、子どもが他者との相互作用的な知識構築によって自分の学びに自信をもつことを目標にした。この目標達成は、上述の課題①②の解決につながると考えた。

## 研究方法

相互作用的な知識構築を支える学級文化を構築するために、グラウンド・ルール(以下、GR)に着目した。GRとはクラス全体で共有されている会話運用のルールのことである。

国語科の授業においてGRの構築を図ることにした。国語科の教科書(光村図書)から、説明文「時計の時間と心の時間」、話すこと・聞くことに関わる「聞いて、考えを深めよう」「いちばん大事なものは」を選択した。選択した内容の授業において、発表の仕方や発表の聞き方についてのルールを教師と子どもとで決定することにした。決定した内容は教室内に掲示することで明示的に示すことにした。

学級文化の構築による子どもの変容は、マインドセットの変化とそれに伴う学習行動の変容から分析を行った。

マインドセットは、固定と成長に分けられている。固定マインドセットとは、自分の能力は固定されており変わることはないと考えられることである。一方、成長マインドセットとは、自分の能力は努力次第で伸ばすことができると考えることである。子どもが自分の学びに自信をもてば、マインドセットにも変化がみられると想定した。質問紙により、どのようなマインドセットをもっているのか、マインドセット値を調査した。臨時休校終了時の6月と4か月後の10月に実施し、それぞれの子どものマインドセット値の結果を比較することにした。

学習行動の分析は、理科の授業を対象にした。「植物の養分と水の通り道」(7月)「燃焼の仕組み」(7月～8月)「水溶液の性質」(9月～10月)の3つの内容を実践して、子どものノートの記述内容や授業内での発言・様子から学習行動の変容を分析した。

## 結果・成果と今後の課題

右の写真は、GRを掲示している様子である。掲示することによって授業中にいつでも見ることができるようにした。自分の考えを発表して認められることにつながるGRや他者の考えから学ぶことで自分の学びに自信をもつことにつながるGRがクラス全体で決定された。

マインドセット値の上昇と下降が見られた子どもを抽出し、学習行動の変容を分析した。マインドセット値が上昇した子どもを分析した結果、「他者の考えを取り入れて考えること」「クラス全体に向けて自分の考えを発表すること」の2つの変容が見られた。一方、下降した子どもを分析した結果、発表への意欲はあるが「クラス全体に向けて自分の考えを発表する」ことに課題が見られた。

マインドセットの変化や学習行動の変容だけで個々の子どもを推測するには限界があった。個別のインタビューなどで、その子どもの思いやその時の状況まで含めた詳細な分析が必要であったと考えている。

共同研究者：杉野さち子(お茶の水女子大学附属小学校)、林徳郎(札幌市立円山小学校)、本間峻太(釧路市立愛国小学校)

